笑顔と情報を発信するコミュニケーションマガジン

山大医学部病院だより

2021
1
VOL.249

特集

形成外科のコモンディジーズ

新年挨拶

山口大学医学部長
篠田　晃

新年明けましておめでとうございます。困惑と不安に苛まれた令和2年が終わりを告げ、新たな願いと希望を抱いて令和3年が始まりました。医学部・附属病院関連の皆様におかれましては、新型コロナ対応下での御苦労と御献身に心から敬意と感謝を申し上げます。家庭では自粛、ステイ・ホーム、病院ではコロナ禍中の診療、ケア・介護、給食・配膳、事務対応等に体力と精神を消耗する中、慌ただしく、心忙しい年末年始を過ごされたことと拝察しております。

医学部・附属病院では昨年、チーム「CoviCoM」とチーム「YUMECO」を設置して新型コロナ対応に当ってまいりました。リモート授業・会議システム、サーモ測定機、PCR検査体制、コロナ感染病床対応体制等を整備し、「三密回避」「衛生管理」「健康管理」をしながら、診療にも学生実習や講義、研究にも抜かりがないよう対応いたしました。しかし振り回されてばかりはいられません。医学部も病院も最高学府として、最終砦にして最高医療機関として、常に毅然として前を向いて進んでいかなければいけません。既に昨年から、教育では「早期外科教育と国際化教育」の導入に向けて準備が始まり、研究ではFOCSチームを結成して、発展性の高いオリジナルな革新的研究の発掘と育成プロジェクトをスタートさせております。またAIシステム医学・医療研究教育センター（AISMEC）によるデータサイエンスとシステムバイオロジーの有機的発展と附属病院のAI化の実現についても始動しております。特に阿知須地区高齢者を対象に認知症や介護状態をAIで解析する地域コホート研究については、山口県と山口市に島津製作所と花王と協同乳業（名糖）の6者間協定が締結され、医学部内に山口大学社会連携講座が設置されました。臨床研究棟や病棟の改修工事、再整備も始まります。これ等を受けて、いよいよ今年は、さらなる発展を目指すべく、活動実体を充実させる年となるでしょう。

社会は今、掴み所がなく、しつこい新型コロナの猛威に曝され、〝神経症の淵〟に追い込まれているように見えます。活動性の維持・発展と活動の自粛・抑制の〝線引き〟や〝バランス〟が問われているのでしょう。20世紀後半からヒートアップしたバブル活動を一旦止めて、生活の本質や豊かさや健康を考え直す新たな時代の幕開けなのでしょうか。新年2021年の干支は「辛丑（かのとうし）」。「丑」は、元々は「チュウ」と読み、植物が種の中でまだ眠っており、物事が始まる潜在状態を表します。「辛丑（かのとうし）」は辛い時期を牛のように泰然と構えて凌ぎ、次に来る運気とともに才能や努力が芽吹く前段階を意味する年と言えます。牛は一心不乱に牧草を食（は）み、反芻して細かく噛み砕き、胃の微生物がこれを摂取して大量に増殖し、4つの胃袋で牧草を消化・代謝して、タンパク質豊富な牛乳や筋肉に変えて大きな体に成長します。今年は平生忘れがちな自身の反芻・再点検を行い、新時代に備えて新たなシステムを構築し、来たるべき大きな飛躍・発展に万全を期する実力を蓄える年となるでしょう。コロナ禍でも最高学府・病院としての誇りと責務を意識し、自己実現と社会貢献の喜びを実感し、働き甲斐や学び甲斐の感じられる活動を止めないようにしたいと考えます。山口大学医学部・附属病院の皆様には、今後とも寛容で温かい御理解と御支援、御協力を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

Topics

医学部医学科白衣着衣式を挙行しました

12月18日（金）、A棟1階オーディトリアムにおいて、医学部医学科白衣着衣式を挙行し、山口大学医学部同窓会霜仁会（そうじんかい）福本会長、篠田医学部長、杉野医学部附属病院長をはじめとする関係者が列席しました。

本式典は、臨床実習を前にした学生に霜仁会から白衣を授与し、医学生としての決意と自覚を促すことを目的に毎年開催しています。

式では、はじめに篠田医学部長から、「すべての人に敬意を払い、相手の立場に立ち、無償の愛で接しながら、日々精進してください」と訓辞があり、全国医学部長病院長会議認定のStudent Doctor（医学実習生）認定証が学生に授与されました。続いて福本会長から、「医療の道は非常にやりがいのあることは間違いないので、勇気を出して一歩を踏み出してほしい」と祝辞があり、4年生126名に白衣が授与され、学生は一斉に白衣を身に着けました。

その後、学生代表の飯田美里さんが、「医療人となることを志す者としての自覚を高め、頂いた白衣の責任と使命を胸に、日々精進していくことを誓います」と宣誓し、これを受けて、杉野病院長から、「白衣を着ている以上、学生であっても医師と同様に見られるので、医師の一員としての自覚を持ち、これからの臨床実習を有意義なものにしてください」と期待を込めた挨拶があり、学生全員が医学生としての決意を新たにして式を終えました。

例年白衣着衣式と合わせて4年生の保護者を対象とした保護者会を開催していますが、今年は新型コロナウイルス感染防止のため、同式をライブ配信しご家族に映像をお届けしました。

新年挨拶

山口大学医学部附属病院長
杉野　法広

新年明けましておめでとうございます。

山口大学医学部附属病院では、国立大学病院としては初となる2回目の病院再開発整備事業を平成27年度から進めています。その主要事業である新病棟（A棟）は、令和元年の6月24日に開院し、現在、順調に稼働しています。今後は、B棟（第1病棟）の改修が今年の8月から始まり、その後C棟（外来棟）の改修・整備が令和7年まで引き続き行われる予定です。老朽化・狭窮化が改善され、これまで以上に医療の高度化、専門化に対応できるようになり、患者さんのニーズにもお応えできるようになります。

さて、新型コロナウイルスCOVID-19感染は、現在、第3波が大都市を中心に全国的に感染が拡大しています。本院では、これまで通りの高度医療を提供するために、患者さんが安心して必要な医療を受けられる環境、職員が安全に医療を提供することができる環境を整えています。昨年4月15日に立ち上げたCOVID対策チーム（YUMECO）が中心となっています。チームリーダーは、感染制御部・部長で呼吸器・感染症内科の松永和人教授が務めています。YUMECOは、入院診療体制整備グループなど6つのグループからなり、それぞれが医師、看護師、検査技師、薬剤師、放射線技師、栄養士、事務職員など多職種のメンバーで構成されています。横断的な連携をはかり、かつ、具体的な対策を練って病院が一体となり対応しています。特に、コロナ流入を阻止する水際対策と院内感染の防止が大切です。入館時の体温チェックと確認票による移動歴などのチェック、入館・面会制限や発熱トリアージ外来の設置に加えて、昨年8月3日からすべての入院患者さんに入院前にPCR検査を実施し、陰性を確認してから入院をしていただいております。新型コロナウイルス感染症では、発熱などの症状がない場合でも感染していることがあります。入院患者さんが無症状の感染者であった場合、手術や麻酔および入院治療や侵襲的検査によって、免疫力が低下し新型コロナウイルス感染症の症状を発症し重症化することがあります。また、新型コロナウイルス感染症によって原疾患がさらに重症化する恐れがあります。これらを未然に防ぐこと、および院内で患者さんから患者さんへの感染を防ぐことで安全を確保し、安心して医療を受けていただけます。

ウイズコロナ社会においても、これまで通りに安心・安全な医療を患者さんに届けるという使命を果たすべく、まさに「チーム山大病院」となり、教職員が一丸となって新型コロナウイルス感染症の対策に尽力しています。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、今年が皆様にとってすばらしい年になりますようにお祈り申し上げます。今年も山口大学医学部附属病院をよろしくお願い申し上げます。

山口県で初めて在宅医療専門医に認定されました

左から　廣田医師と玉野井医師

山口大学総合診療プログラム※の指導医２名が、山口県で初めて日本在宅医療連合学会の在宅医療専門医に認定されました。

専門医に認定されたのは、廣田勝弘医師（本学臨床講師・生協小野田診療所長）と玉野井徹彦医師（本学非常勤講師・同所）です。

在宅医療専門医は、在宅で療養するすべての人の尊厳を守り、本人と家族のQOL（人生および生活の質）の向上を図るため、質の高い在宅医療の実践を通じて、人生の最終段階も含め、安心して暮らし続けられるよう地域づくりに貢献することが求められます。学会が認定した在宅医療研修プログラムを修了し、筆記試験、面接を経て、同学会より認定されます。

県内では初めての認定で、質の高い在宅医療を提供できる証となります。また指導医になることで、在宅医療専門医を育てることができるようになります。

※山口大学総合診療プログラムとは

山口大学総合診療プログラム HP
https://www.ube-hp.or.jp/resident/general/program.html

新教授就任のごあいさつ

山口大学大学院医学系研究科
法医学講座　教授
髙瀬　泉

この度、令和2年11月1日付けで法医学講座の教授に就任致しました髙瀬泉（たかせいずみ）と申します。

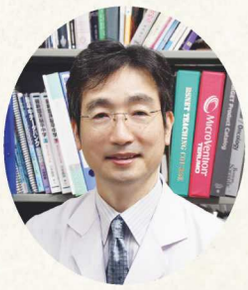
私は兵庫県で生まれ、平成10年に大阪医科大学を卒業後、東京大学の大学院に進みました。大学院では、指導教官から法医解剖の知識・技術のみでなく、ご遺体へ向き合う姿勢についてもしっかり教わり、それが法医学者としての私の根幹を成していると思います。また研究面では、社会医学的な事柄に関心があったため警察庁・警視庁、また、東京と大阪の救急告示医療機関のご協力を得て、日本における強かん（現在の刑法の強制性交等罪に相当）の被害者への医療者および警察官の対応について質問紙調査を実施し、その結果をまとめて博士号を取得しました。平成21年10月に山口大学に着任してからは、山口県内の死因究明業務および他府県を含めた臨床法医学鑑定（児童虐待や性犯罪の生体の損傷鑑定）に携わってまいりました。

令和2年4月1日より死因究明等推進基本法が施行され、「死因究明等に係る医師、歯科医師等の人材の育成、資質の向上、適切な処遇の確保」「死因究明等に関する教育及び研究の拠点の整備」等が基本的施策として挙げられますが、全国の法医学教室の4割で鑑定人が1人しかいないという現状にあります。

当講座は、現在年間130件前後の法医解剖の執刀に加え、東京・大阪や中国・九州地方などの裁判への出廷、ご遺族のご希望があれば警察立ち会いのもと解剖結果の説明も行うなど、臨床法医学鑑定も長年行っている希少な機関として全国的に認識されております。

我々法医学者は、自身の鑑定結果や裁判での証言が事件の当事者のみならず、その周囲の人々の人生にも多大な影響を及ぼすことから、日々、児童相談所、警察・検察等の関係機関との張りつめたやりとりの中におりますが、多数の事案に積極的に取り組むことで、再発予防や社会の安全、福祉の維持に貢献してまいります。

当講座は令和3年4月に半世紀ぶりに山口大学出身の大学院生を迎えます。法医学の後継者育成のため、また講座の発展に向け、今後も毅然と真実の追求に努めますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。



山口大学大学院医学系研究科
脳神経外科学講座　教授
石原秀行

令和2年11月1日付で、脳神経外科学講座教授を拝命致しました石原秀行（いしはらひでゆき）と申します。新任のご挨拶を申し上げます。

私は静岡市の出身で、県立静岡高校を卒業後、山口大学医学部で学び平成4年に卒業後、山口大学脳神経外科学講座に入局しました。同時に大学院に入学し、脳腫瘍細胞の抗腫瘍薬に対する耐性獲得機序を研究し医学博士を頂きました。平成10年に専門医を取得後、スイス連邦チューリッヒ大学脳神経外科への留学の機会を頂き、2年余り膠芽腫による血液脳関門障害に関する研究を行いました。同施設は、脳神経外科のバイパス術発祥の施設で、私が実験を行っていた研究室の隣が顕微鏡手術のトレーニング施設でしたので、ここで顕微鏡手術のトレーニングを受けました。平成13年に帰国後は、脳血管障害を担当することになり、平成15年から脳血管内治療を日本で最も行われている神戸中央市民病院、そしてジュネーブ大学神経放射線科で脳血管内治療を学び、平成18年に山口大学へ戻って参りました。この時期に一致して、脳梗塞に対する治療が大きく進歩しました。一つは rt-PA 静注療法で、発症早期であれば注射で血栓を溶かして治す可能性が生まれました。もう一つは脳血管内治療による再開通療法です。この10年の間に、以前は治すことが出来なかった患者さんをかなり治療することが出来るようになりました。しかし、山口県は小さな街が県内に分散する地理的条件から、県内に広くこのような進歩した治療や脳腫瘍、機能的脳神経外科治療を提供することに課題があります。山口大学医学部附属病院は県内関連施設の基幹病院ですので、その機能を発揮して広い範囲の施設と連携により県内に隈無く脳神経外科診療を提供して行けるよう尽力したいと考えています。

医療現場からのニーズ・シーズ発表会を開催しました

12月15日（火）、A棟オーディトリアムにおいて、医療現場からのニーズ・シーズ発表会を開催しました。

本会は、産学公連携による新たな医療機器等の研究開発や事業化の促進に向けた取組の一環として、医学部・附属病院で行っている「研究内容実用化に向けたアンケート」および「医療・看護現場におけるニーズ・シーズアンケート」の回答を基に、医療・看護関連製品開発につながるシーズ、現場の困りごと（ニーズ）を発表するもので、やまぐち医療関連成長戦略協議会、地方独立行政法人山口県産業技術センターとの共催で、毎年開催しているイベントです。

基調講演では、整形外科学講座坂井孝司教授から、医工連携を成功させるポイントなどについて自身の事例に基づいて紹介があり、加藤紘元学長も座長として参加しました。

続いて、研究者と薬剤師、看護師と様々な職種の4人から、それぞれの研究や医療現場におけるニーズ・シーズに関する発表が行われました。

発表会終了後の情報交換会では登壇者や参加者同士の交流が活発に行われ、今後の産学公連携の足掛かりとなることが期待されました。

コロナ禍での開催ではありましたが、学内の研究者、産学連携関係者や県内を中心としたものづくり企業の担当者など、多くの方々にご参加いただき、盛況のうちに終えることが出来ました。

上記に関する問い合わせ
学術研究部ライフサイエンス支援課研究支援係
Tel 0836-22-2060(内線3288)
Fax 0836-22-2116
E-mail：sh079@yamaguchi-u.ac.jp

ニーズ・シーズ発表会の様子

基調講演の様子
整形外科学講座　坂井教授

YouTube山口大学病院チャンネルを開設しました

この度、当院の YouTube チャンネル「山口大学病院チャンネル」を開設しました。最新治療や病院紹介など、幅広く当院の情報を動画で配信していきます。ぜひチャンネル登録のほどお願いいたします！

YouTube
「山口大学病院チャンネル」

スマホで見たイメージ

診療紹介「知っちょる？山大病院」

A 棟紹介映像

特集

形成外科のコモンディジーズ

2019年4月に形成外科を開設して1年半が経ちました。形成外科で最も大きな仕事の1つは再建外科です。山大病院ではがんの患者さんが多いので、皮膚がんの切除と再建、耳鼻咽喉科や歯科口腔外科と合同で行う頭頸部がんの再建、乳がん術後の乳房再建などの手術を主に行っています。しかし形成外科では他にも多くのコモンディジーズ（一般的な疾患）を治療対象としています。今回はその中で4つの疾患について解説いたします。

1　顔面骨骨折

顔面骨骨折で最も多いのは鼻骨骨折です。頬部の陥凹を来たす頬骨骨折や眼球を収める眼窩骨折の頻度も高いです。交通外傷の他、スポーツや転倒でも受傷することがあり、小児から高齢者まで全ての年齢層で見られます。眼窩骨折では複視（ものが二重に見える）、上下顎骨折ではかみ合わせのズレを生じますが、頻度の高い鼻骨骨折と頬骨骨折では機能的な症状を残すことはほぼなく、ほとんどが整容面（顔面の変形）のみの問題となります。それゆえ形成外科医のいない地域では、機能障害がないのなら治療必要なしと判断されがちです。しかし形成外科医は幾つになろうが見た目も重要と考えます。性別年齢関係なく、整容性は十分な手術理由です。顔面骨骨折の手術では下まぶたの際や口の中など、傷が目立ちにくい部分を切開し、ずれた骨を整復してプレート（チタン製や吸収性素材）で固定します。鼻骨骨折は鼻腔内に器具を入れて整復するだけで、皮膚の切開や骨の固定は行いません。手術はすべて全身麻酔で行います。

2　眼瞼下垂症

上まぶたが挙がりにくくなり、視野の狭窄を生じる病気です。見にくさをカバーするために無意識に眉毛を挙上したり、顎を上にあげたりする癖がついてしまい、頭痛や肩凝りが生じることもあります。眼瞼は皮膚の下にある瞼板という組織を眼瞼挙筋が引き上げることに

よって開きます。病態として最も多いのが、眼瞼挙筋が瞼板から外れる腱膜性下垂です。物理的な刺激で外れるので、ハードコンタクトレンズの長期着用や白内障手術後などでも生じます。経年劣化ともいえる老人性下垂も多く見られます。手術では二重まぶたのラインを切開し、外れた腱膜を止め治します。目が大きくなり、二重まぶたになります（奥二重も可能です）。先天性の下垂など症状が強い場合は、太い糸や太ももの筋膜で吊り上げを行う前頭筋吊り上げ術を選択する場合もあります。手術中に適宜座ってもらい眼瞼の開き具合を確認しながら調整しますので、局所麻酔で行います。片側だけの場合は日帰り手術も可能ですが、両側の場合は入院をお勧めしています。

3　糖尿病性足潰瘍

糖尿病の合併症の1つに足潰瘍があります。糖尿病性足潰瘍は4つのタイプに分類されます。

Ⅰ　神経障害によるもの
Ⅱ　血行障害によるもの
Ⅲ　感染によるもの
Ⅳ　血行障害と感染を伴うもの

です（神戸分類）。それぞれのタイプによって治療法が異なってきます。例えばタイプⅠなら装具作成、タイプⅡなら血行再建です。きずがあるから塗り薬を塗ろう、趾（し）が腐っているから切断しようではなく、的確な病態診断と治療法の選択が重要です。当院では第一外科（血管外科）や第二内科（循環器内科）と連携し、軟膏を用いた保存療法や陰圧閉鎖療法、手術（切断、再建）を組み合わせて治療を行っています。治癒までに時間を要することが多い疾患ですが、患者さんの歩行を守ることを第1目標としています。

4　褥瘡（じょくそう）

褥瘡＝床ずれは同じ体位を長くとっていると生じる慢性創傷です。仰向けだと仙骨部、横向きだと大転子部、車椅子では坐骨部が好発部位です。寝たきりの方に生じやすいので手術を選択するケースは限られますが、脊髄損傷や二分脊椎により下半身麻痺となってしまったが、上半身は元気で車椅子生活が自立している方の坐骨部褥瘡などには積極的に手術を行っています。手術では褥瘡を切除し、皮弁（周囲の皮膚や筋肉）で再建します。手術はあくまで今在るきずを治す手段です。最も大切なのは再発の予防です。当院では皮膚・排泄ケア認定看護師がおり、体位変換指導や車椅子のシーティング調整などを行っています。

山口県内には形成外科専門医が常勤で診療を行っている施設が当院を含めて5つしかなく、明らかに形成外科過疎地域です。しかしながら開設して1年半、上記に挙げたようなコモンディジーズの患者さんが少ない印象がありました。それは患者さんが医療を受けられずに放置されているというわけではなく、形成外科不毛の地において地域の先生方が専門外にも関わらず頑張ってこられてきた証ではないでしょうか。今山大には我々形成外科がいます。他院入院中の患者さんでも転院で受け入れて治療を行うことができますので、いつでもご相談ください。

煎り大豆のミネストローネ

2月は『節分』無病息災を願い、厄払いとして豆をまく風習があります。
今年の節分は、暦の関係上2月2日になるのだそうです。
その節分の豆が余った時には、体の温まるスープを作ってみませんか。
下ごしらえすれば、後はコトコト煮るだけでできあがる簡単スープ。
豆やベーコン、野菜のうまみで薄味でもおいしく食べられます。
食物繊維やカリウムがしっかりとれる1品です。
（ただし腸疾患や腎疾患のある方には不向きです）

材料（作りやすい分量、8皿分）

●煎り大豆	100g
●ベーコン	60g
●かぶ	大1個（皮むき500g程度）
●玉葱	300g（1玉）
●トマト	250g（1個）
●セロリ（あれば）	25g
●オリーブオイル	大さじ1
●野菜ジュース	1本（190g）
●コンソメ	4g（1個）
●塩	小さじ1/4

エネルギー	約130kcal
たんぱく質	6.9g
塩分相当量	0.6g
食物繊維	4.5g
カリウム	658㎎

（栄養成分は1皿分）

作り方

（下ごしらえ）
- 煎り大豆を水で戻す（10分程度）
- ベーコンを食べやすい大きさに切る。
- かぶは厚めに皮をむき、トマトは皮を湯むきする。
  玉葱も皮をむいて、それぞれ一口大に切る。
  セロリは筋をとって薄切りにする。

①鍋にオリーブオイルを敷き、ベーコンと切った野菜、水切りした煎り大豆を入れて炒める。

②全体に油がまわれば、具材がかぶるくらいの水（分量外）と野菜ジュースを入れて中火で豆が柔らかくなるまで煮る。（20分程度）

③豆が好みの硬さまで柔らかくなれば、塩で味を整えて、できあがり。

＊写真には飾りとして花形にんじんを入れています

大豆の栄養成分としての働き

たんぱく質、ビタミンB群が多く、昔から大豆は「畑の肉」と呼ばれて親しまれています。
良質の不飽和脂肪酸を含み、動脈硬化予防や肥満をコントロールする食品。
ダイズイソフラボンは骨粗鬆症予防、更年期障害を緩和してくれる働きがあります。

参考文献　「食の医学館」より
監修：有冨早苗・福田有子

YouTube「山口大学病院チャンネル」で
本院の診療情報などを配信中！！

企画発行
山口大学医学部広報委員会・山口大学医学部総務課総務係
〒755-8505　山口県宇部市南小串1丁目1番1号　TEL 0836-22-2007
医 学 部　http://www.med.yamaguchi-u.ac.jp/
附属病院　http://www.hosp.yamaguchi-u.ac.jp/